

記憶の扉を開ける

—— 雨量変動に応じたグイ人の出会いと別れ ——

今村 薫

一 雨量と離合集散パターン

アフリカ南部、南回帰線沿いに東西に広がるカラハリ砂漠は、砂漠という名前から受ける印象とは異なり、荒涼とした草原がどこまでも続くサヴァンナのような景観である。内陸部に位置するため降水量は少なく寒暖の差が著しい。また、この地は海拔一一〇〇メートルの高原であるため、夏の日中は摂氏五〇度近くまで気温が上昇する反面、冬には冷たい南風が吹き荒れ、明け方には霜が降りる。

このカラハリに住む狩猟採集民ブッシュマン(図1)は、厳しい自然環境に応じて集団の構成を変えることが早くから指摘されてきた。北部カラハリに住むクン(現在の呼び名はジュホアン)を調査したリチャード・リー(Richard. B. Lee 1979)や、セントラル・カラハリ・ブッシュマンの調査に従事した田中二郎(一九七二)の報告は、ブッシュマンが季節変動に合わせて流動的な居住集団を形成することを明らかにした。しかしながら、同じカラハリ砂漠の住人とはいえ、クンの集団形成のパターンはセントラル・カラハリ・ブッシュマンのものとはまったく逆である。

比較的降雨に恵まれた地域に住むクンは、雨季に至るところで水を得ることができるので、雨季にはたくさん的小集団が分散して暮らす。そして、乾季になると限られた数の恒久的水場に人々が集まり大

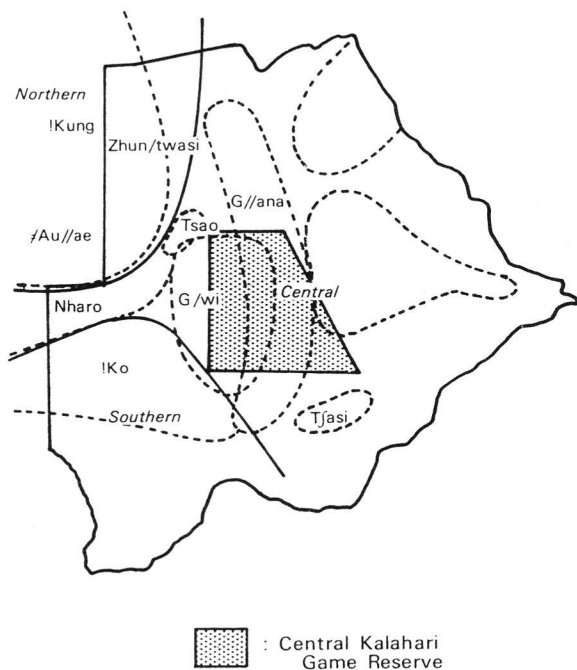


図1 ブッシュマン言語グループの分布

表1 ブッシュマンの地域集団における離集性のパターン*

雨量	地域集団	乾季	雨季
多	ナロ	+	+
↑	クン	+	-
↓	セントラル・カラハリ	-	+
少	コー	-	-

＋、－はそれぞれ集団が集中および分散することを示す。

*市川(1986)より改変

集団が形成される。ところが、セントラル・カラハリ・ブッシュマンが住む中部カラハリはより乾燥が厳しいため、乾季にはほとんど表面水が手に入らず、人々は野生のメロンやウリ科の植物の根茎などの水源植物に依存して生活している。その結果、植物のまばらな分布に合わせて乾季の間は小集団で分散して暮らす。そして、雨季に入って食物が豊富になり、水場が使えるようになると、そこに人々が集中して大集団が形成される。

右に述べた二集団に、ナロとコーの二集団を加えたブッシュマンの四集団(これらは、地理的分布だけでなく言語的にもまったく異なる集団でもある)の集団形成パターンを比較したアラン・バーナード

(Barnard 1979, 1986)によれば、

クンよりもさらに水に恵まれた環境に住むナロは、雨季乾季を問わず比較的凝集性の高い大きな集団を維持している。また、セントラル・カラハリ・ブッシュマンよりさらに厳しい環境に住むコーは、一年を通じて小集団に分散している。これら四つの社会は、利用できる水資源に合わせた集団形成の分散と集中に関して可能な四パターンのすべてを示しているのである(表1)。

この小論では、今まで述べてき

(一)

ような「季節に合わせた離合集散性」を背景に、セントラル・カラハリ・ブッシュマン(グイとガナの二言語集団からなる)の伝統的な「原野での生活様式」を内側から凝視し、内在的に理解することを試みる。

グイとガナは、一九七〇年代後半まで水資源と食糧を求めてカラハリ砂漠で遊動生活を送っていた人々である。私が調査を始めた一九八八年には、カデ地区に定住するようになってはいたが、遊動していたころの生活をはっきり記憶している人がまだ多かった。そこで、古老を中心に、彼らのかつての生活と経験を彼らの語りから記録することにした。

旱魃の年に、飢えと渇きと暑さで朦朧とする意識の中で考えたこと。灼熱の中で父と母と子でライオンが吼え続けるブッシュに食糧を捜し求め、焚き火を頼りに荒れ野に眠った日々。そして、対照的に雨の季節に演じられた、人々のお祭り騒ぎと若者の暴走。そんな遊動生活の記憶の断片を次々と繰り出して見せるグイの知人を目の前にして、その圧倒的な事実には私は言葉を失っていた。

彼らが語ってくれた「昔の生活」から明らかにしたことは、親戚や知り合いが大勢集まって賑やかに暮らしたこともあれば、両親ときょうだいだけでひっそりとした生活を送ったこともあるという、その明暗の対比であった。それは、田中による「ブッシュマンの集団構成の特徴は、離合集散性にある」(田中 一九七二・一六六・一七八)という観察者としての指摘を、ブッシュマン側からの体験として私に知らしめるものであった。

伝統的な遊動生活を送っていたころの記憶を語ってくれた人は、グアリ(女性)、ギオキユエ(女性)、コウ(男性)、ツォーテベ(男

性)の四人のグイ人である。彼らは、一九九四年当時の推定年齢が、いずれも六〇〜七〇歳の高齢者だった。本稿においては、彼らが語った一九三〇〜一九六〇年代の生活の中から、季節に関係する部分だけを抜粋した。年代を推定する大まかな指標として、一九五〇〜一九五一年の天然痘の流行(大崎 二〇〇一・八二八四)を参考にした。

二 厳しい乾季をしのご

ひどい乾季に耐えていた。ひどい乾季に耐えていた。太陽が人を苦しめる。わたしたちは、長い間、人に会わなかった。太陽一つに苦しめられて、じっと横になっていた。ただ、体だけがそこにあった。

ひどい乾季に耐えていた。熱い風が吹いていた。人が恋しくなる。心が痛くて、こう思う。「どこで、どのようにして、あの男は、このひどい乾季に耐えているのだろうか。」

ひどい乾季に耐えていた。風の音を聞いた。湿った風の匂いを味わった。「やがて、雨が降ってくる。人々が集まって、あの男もやって来る。」

彼女が、このように思っていると、雨が降ってくる。このときこそ、彼と彼女は一緒になる。互いに求め合っているの、行って、出会って、一緒になるのだ(グアリ、一九九四年九月二日採録)。

セントラル・カラハリ・ブッシュマンの集団が頻繁に離合集散を繰り返した要因の一つに、自然環境、とくに降水量の季節変動がある。

彼らの住むカラハリ砂漠中部の平均年間降水量は約四〇〇ミリであるが、年によって一七〇〜七〇〇ミリまでの差がある(田中 一九七一・四六)。しかも、この降雨は一年の三ヶ月間に集中しており、雨季(二月から三月)と、乾季(四月から十一月)がはっきりしている。乾季にはまったく表面水が手に入らず、この厳しい季節を耐えるため、彼らは小集団に分散して生活する。そして、雨季に入って食物が豊富になり水場が使えるようになると、人々は一ヶ所に集住し大集団が形成される。グイおよびガナは以下のように季節を分けている。

ナオシ(夏) 二月〜三月 一日から数日にわたる豪雨が何度も降り、植物がよく育ち開花する。しかし、年によっては雨季の間でも数週間かそれ以上まったく雨の降らないときがある。

バラシ(秋) 四月〜五月 植物が実る収穫の季節。雨は次第に少なくなり、気温が低下し始める。

サオシ(冬) 六月〜八月 雨はほとんど降らず、気温は年間の最低を記録する。夜は氷点下になる日が続く、植物は枯れて大地には緑がなくなる。

コーシ(春〜初夏) 九月〜十一月 穏やかな春の日は続かず、一夜にして夏に突入する。とくに一〇月〜十一月は長い乾季の最後にあたり、もっとも乾燥し暑い。日中温度はしばしば摂氏四〇度を超える。通常は十一月に初めての降雨があり、植物はいっせいに芽を出し始める。

このように四季に分けられるのは、降雨に恵まれた年だけである。

数年に一度は、彼らが「ナオシもバラシもない」と表現する、一〇〇〜二〇〇ミリ程度の降雨しかない早魃の年がやってくるからである。グイは、このような早魃の年を「悪い年」と呼び、豊富な降雨に恵まれた「良い年」と区別している。

「悪い年」には、雨が降るべき一二月、一月になってもいっこうに湿った風が吹いてこず、いよいよ威力をます太陽にじりじりと地上の物が焼き焦がされる。こうして、植物は立ち枯れ、動物もやせ衰える。大早魃の年が始まる。この熱波が襲う夏をなんとかしのぎ、秋から冬には利用できうる限りの植物の根をすべて掘り尽くし、短い春をやり過ごし、再び夏が巡ってきて雨が到来するその日まで、ひたすら生きている時間を引き伸ばすことに専念するのである。そのサバイバルの方法をグイの女性が語った。

わたしたちは、水の無い年の乾季の過ごし方を知っている。悪い年には人々は、ツァーを掘った。ビーを掘った。オムツェを掘った（注…ツァー、ビー、オムツェはいずれも根茎を食用に利用する植物のグイ語）。ビーを削って、削って、削って、それを手で握って水を搾る。そして、その水を飲む。誰もが、ひどい乾季を凌ぐときは、このようにした。きっちりと小屋を作って、隙間無く草を葺く。その中に座って、今言った食べ物を食べる。人は太陽こそを恐れる。太陽が人を焼き殺すことを恐れて、隙間無く小屋の草を葺く。こうして、日陰に休む。

とても暑いとき、人は尿をためて、それを浴びて、浴びて、浴びまくった。とても暑いときに、尿で身体と顔を洗った。それから、

砂を尿で湿らせ、その砂を腕にまぶし、腿にまぶし、脛にまぶし、身体に塗り付け、背中にもその砂を載せた。人は、心臓の動悸が速まると、こんなことをした。

ひどい乾季のとき、人は横になった。砂を浅く掘って、そこに横たわった。それから、尿で湿らせた砂を体にかけて体を埋めた。そして、涼しさを感じると眠った。ただ眠った（ギオキエ、一九九四年八月二八日採録）。

グイは、「早魃の年の乾季を耐えしのぐ」ということを、「ガー」という一つの短い単語で言い現す。この「ガー」という言葉は、彼らの日常会話や、昔の体験談の中にしばしば出てくる。早魃の年の乾季をしのぐ究極の方法は、貴重な水分である自分の尿を振りかけて体を冷やし、砂を掘ってその穴の中でひたすら眠って体力を温存することである。暑さと渇きで意識も遠のき、看取る人もないまま、真空のような孤独の中で永遠の眠りについてしまった人もいたに違いない。こんな死も、ディーゼルエンジン付きの井戸水を利用する現代のグイにとっては、もはや昔話となっている。

乾季には乏しい水資源にあわせて少人数に分かれ、それぞれの土地でひっそり暮らした。そして、今は別れて暮らしている親類や友人を思いながら、小屋に引きこもっていたのである。

人が悪い年の乾季を過ごすとき、ある人は、自分がいつも乾季に使う土地にこもって、じっと乾季を耐える。別の人は、別の土地にこもって、じっと乾季を過ごす。彼らは長い間、互いの顔を見ずに

暮らす。太陽が人を苦しめるとき、わたしたちは長い間集まらない。

やがて、雨が降り出す。雨が向こうの土地に降るのが見える。すると、彼らはそれぞれの場所で同じことを、雨が降っている場所のことを考え合う。こうして、彼ら二人は再会して一緒にになる。

「オッ、彼が今、あそこに立っている。おれが思っていたとおり。」

「オッ、とうとう彼は出てきたぞ。おれが想像していたとおり。」

こうして、彼ら二人はそこで一緒にになる。

「この水場でこそ、おれたち二人は、こうして一緒にになった。」

「おれは明日、垢をこすって、こすって、水で体を洗うぞ。」と、一人が言う、

「おれも明日、同じことをするよ。」と、もう一人も言い、彼らは水辺に座って水を飲む。彼ら二人は、満足するまで水を飲む（ゲーリ、一九九四年九月二日採録）。

最も暑さと乾燥が厳しいコーシ（春〜夏）をしのぎ切ると、雨のナオシがやってくる。ここで、一転して人々は生き返ったように活発になり、水場のまわりに集まってくる。水場とは、南部アフリカでパンと呼ばれる石灰質の浅い窪地に、降雨が溜まってできた水溜りのことで、大きなものでも二ヶ月もすれば干上がってしまう。

この限られた期間だけに出現する水場での集会は、長い逼塞生活から開放された人々に、とりわけ大きな喜びをもたらした。水場で出会

う人は顔見知りである場合が多く、互いのキャンプの様子や、野生動植物の在り処などの情報交換を賑やかにおこなった。水場で、キャンプ訪問の約束を交わすこともあったようだ。

三 原野に生きる

人々と集まって暮らすことの対極にあるのが、原野での孤独である。孤独のまま原野でライオンの咆哮を聞くような状況をグイは「アオグナ（心細い）」と表現する。

ライオンだ。ライオンこそが、わたしの夫を殺したのだ。夫とトゥゴマの二人が、猟にいった。わたしの夫は雌のエランドを殺した。矢で射抜いてエランドを倒した。彼らはエランドの肉を、ナイフで切り分け、切り分け、切り分けた。それから寝ようとして火を熾し、焚き火の側に座っていた。すると、いつの間にかライオンが忍び寄り、わたしの夫に爪をたてて襲いかかった。トゥゴマは、すぐに立ち上がり槍を突き刺した。ライオンに向かってだよ。

トゥゴマはライオンを槍で突き刺し、ライオンは男たちに襲いかかった。彼ら二人は逃げた。ライオンを恐れて走って、走って、古い廃屋にたどり着いた。その廃屋へ駆け込み、火を熾そうとして種火を枯れ草に移した。大急ぎで火を大きく燃え立たそうとした。でも、火がまだパツと燃え上がらないうちに、ライオンが小屋に入ってきた。小屋に入って、わたしの夫を引きずり出した。わたしの夫をくわえて振り回し、ついに彼を殺した。

ライオンこそがわたしの夫を殺したのだ。夫は、わたしのキャンプにはもう二度と帰らなかった。彼は、あそこで死んでしまったのだから。いとこのトゥゴマは、一人で帰ってきた。しかし、彼もライオンに頭を襲われていて、顔半分がなくなっていた。首をぐらぐらにさせて帰ってきた。彼は首を傾けたまま、わたしたちにライオンに襲われたことを告げた。彼はわたしに「あんたの夫は、いないも同然」とだけ言って、小屋に横たわった。彼は生き残って帰ってきて、小屋の中に瀕死で横たわっていた。そして、わたしのところには、二度と来なかった。彼は死んだのだ。

ライオンには疲れはてる。わたしたちはパーホ（咬むもの）の意。ライオンなどの肉食獣や蛇を指す）をとても恐れた。ライオンを恐れて、恐れて、人々は一つの小屋に集まり火を大きく焚いた。こうしてライオンを遠ざけた。

夫が死んだその同じ年に、子どもが死んだ。神が死んだとき、子どもが死んだ（病死したときによく使う表現）。わたしは、とても悲しかった。泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、大声で泣いて、悲しくてつらかった。人々は夫と子どもを砂に埋めた。わたしは、泣いて、泣いて、体中痛くて、苦しくて泣いた。それから、移住した。いりんな嫌な物事を捨てて、別の土地に移住した（ギオキユエ、一九九四年八月二八日採録）。

ここでは、ライオンに襲いかかれたときの凄惨な様子が、あたかもその現場に居たかのように語られる。ライオンはもちろん恐ろしい動物であるが、ライオンの方も人間を恐れているので通常は人を襲わ

ないともいう。一度人間を食って味をしめたライオンだけが、人間を獲物とするのである。ライオンを忌み嫌う人々がいる一方で、不敵にも「ライオンはおれの友だちだ」と嘯く人もいる。このような人は、ライオンが草食獣を倒して適当に食べ終えたところでライオンを追い払い、その獲物を横取りすることを専らとする輩である。

原野に生きるグイにとってブッシュは彼らのホームランドであり、パーホも同じ原野に棲む仲間であった。人々にとって最大の脅威は早魃である。早魃時に死と向き合う恐怖を思えば、パーホの啼き声など大したものではなかった。ライオンに夫を殺された恐怖を語った同じ女性が、ライオンと共生する暮らしについても語る。

原野の暮らしは、両親と子どもの三人で原野に住んでいても、心細くなかった。今日、人々が感じるような心細さは、昔はなかったよ。パーホが、あそこで腹が減って啼いている。それでも、人々は冷静にパーホの叫ぶのを聞いた。男の子が言う。「どのくらい離れたところで、パーホが腹ぺこで啼いているのだろうか。」こう言って彼は、パーホを避けながら原野に行く。男の子は、まったく心細くない。原野で眠って、朝になるだけだ。

朝になると、いつものように、男たちは罾を見回りに行き、女たちは採集に出かけた。人々は、心細くなかった。忌まわしいものたちがキャンプに近づく、恐がったり騒いだりするのは最近のことだ。昔は、原野の中には心細さなんてまったく無かったさ（ギオキユエ、一九九四年八月二八日採録）。

グイ人はブッシュでの生き方を知りつくしていた。グイ語で、居住空間であるキャンプのことを「アエ」と呼び、狩猟採集空間である原野を「カエカラ」という。「カエカラ」をここでは原野と訳したが、カエカラは小屋のすぐ後ろから始まってアエを包み込んでいるものであり、アエとカエカラは対立するものではない。原野の中の生活は、少人数であっても安全で穏やかなものであった。それが、村に集まって住まうことが常態化してからは、原野とキャンプのあいだに断絶ができ、どんなに大勢でいてもパーホに怯えるようになってしまったのである。

四 乾季の終わりに求婚

早魃の年でない限りは、乾季であっても先の雨季の間に育った植物や果実が残っており、これらを餌とする動物たちもブッシュに蓄えられている。グイとガナが畏猟にはげむのは、「毛皮の状態の良い六月から八月（冬期）」（池谷 一九九六：三二）、すなわち乾季である。雨季に入ると、畏が湿って跳ねなくなるので畏猟には適さない。畏に掛かる動物は、ステインボック、ダイカーなどの小型のレイヨウ類であり、これらの毛皮はバントゥー系農牧民であるカラハリ人の村（たとえばツェツェンなど）で山羊や砂糖、煙草と交換された。

グイは、結婚に際し、男性が求婚する女性の親族に贈り物を贈る習慣がある。かつては贈り物として、毛皮や砂糖、煙草が好まれた。次に紹介する語りは、グイの男性が若かりしころに、毛皮を携えて女性に求婚に行った話である。乾季の終わりにには畏猟で得た毛皮も相当

な数に達し、若者は来たるべき雨季に意中の少女と結婚しようと、彼女の親族を説得するための旅に出た。

キエマテベ（話し手の兄にあたる男性の名）は、おれをからかって、ふざけて、おれをこう呼んだ。「ドゥアガル（モンキーオレンジのような荷物の包み）の意」。

キエマテベは、ゴエに住んでいた。おれは、カウキューに住んでいた。おれはツェツェンに行こうと、皮で作ったネット（グイ語でガルという）で荷物をくるんだ。畏で捕まえた動物たちの皮、ステインボックの皮、ダイカーの皮をネットで包んで縛った。そして、この荷物を肩に担いでツェツェンへ向けて出発した。おれは、ツェツェンで皮を売ろうと考えていた。そして、煙草を買って、砂糖を買おうと思っていたのだ。

ツェツェンに行く前に、おれはゴエに寄った。おれは、そのときアン（女性の名）を訪問していた。アンと結婚したいと思ってアンが住んでいたゴエを訪問した。おれは、山羊たちがおれの皮をかじらないように、荷物を木にぶら下げておいた。革ひもで枝に縛り付けてぶら下げた。木の切り株に乗って、荷物を枝に縛り付けた。おれは、動物の皮をたくさん持っていたんだ。何枚も、何枚も。

おれは、長い間ゴエで寝た。サオ（冬）にゴエに入り、コーシ（春・初夏）になってもおれはあそこにいた。ひと月の間、おれは向こうで寝た。おれは、年寄りにアンを乞うたが、年寄りはおれを拒んだ。スケレという別の男が、彼女に求婚していたからだ。おれは疲れはてた。おれはアンと結婚したいと思っていたが、別の男が

割り込んできた。おれたち男二人が彼女を引っ張り合った。おれは、そのうち疲れてやめた。皮をアンにやろうと思っていたが、結局彼女にはやらなかった。

おれの荷物が長い間木にぶら下げられたままになっていた。それを見て、キエマテベが言った。「モンキーオレンジ(グイ語でドウアという)。モンキーオレンジが、長い間木に実っているみたいに、あいつは自分の荷物を木にぶら下げている。モンキーオレンジの荷物だ。」と、彼は笑った(ツォーテベ、一九九四年九月一二日採録)。

この話を語ってくれた老人は、この出来事のあと四〇年近く経っていたのに、いまだに親しい者からは「ドウア」あるいは「ドウアガル」という渾名で呼ばれていた。彼にこの渾名の由来について尋ねると、彼は苦笑を交えつつも楽しそうに思い出を語った。この話に出てくるモンキーオレンジの実、黄色に色づいたまま長期間木にぶら下がっている特徴がある。彼が求婚に失敗し、贈り物が何の役にも立たずに木にぶら下がったままになっているのを見た兄は、モンキーオレンジの性質に引っ掛けて、弟の優柔不断さをからかったのである。

五 女性の略奪

雨季が始まり、さらに雨季の後の実りの季節(バラシ)がくると、人々は水場や食物の豊富な場所に集まって暮らすようになる。雨に恵まれた「良い年」のバラシには、百人を超える大人数が一ヶ所に集中してキャンプを構えることもあった。良い年にはキャンプをすぐには

移動せず、長期間一つところに留まった。

採集植物である野生のスイカ、メロン、豆、根茎(広義のイモ)、野草、果実、キノコが実り、人々は、男も女も連れ立って採集に行く。野生動物も、これらを食べて太ってくる。男性たちは弓矢、あるいは槍で、ゲームスボックやエランドといった大型レイヨウ類を倒し、キャンプを越えて次々と肉が分配される。人々は満足のゆくまで自然の恵みを享受したのだらう。「悪い年」の乾季に、息をひそめて生き長らえることだけを考へて暮らしていたときと比べると、バラシ(実りの秋)は毎日が祭りのようである。祝祭的な喜びと興奮に包まれ、人々は頻繁に互いのキャンプを訪問し合った。

そうした中で、若者たちが徒党を組んで、自分たちの欲望を暴走させることもあった。定住以前のグイは、「良い年」の秋になると、しばしば若者たちが集団で他のキャンプを襲撃し、女性を奪ったのである。以下が、かつてそれを行った老人の証言である。

昔の男たちは、人のキャンプで女を見つけると、その女を掴んで、むりやり連れていったものだ。キャンプの人々を、殴って、殴って、殴って、殴った。大勢の若者で人のキャンプに出掛けていき、そこで女を奪った。一人の男のために、男たちが女を取ってやった。昔の男たちはこのようなことをしたものだ。おれたちこそが、このようなことをしたのだ。

とても良い年のバラシ(秋)には、人々は集まって住む。ばらばらに住んでいた人々が集まってくるのである。若者も集まって、若者だけで暮らす。彼らは若者小屋で相談する。「おれは、あの女を

取りたい」「おまえには、あの女を取ってやる」。大勢の若者が、集まって相談するのだ。

翌朝早く、おれたちはキャンプを出発した。おれは、そのときカウキエに住んでいた。ここからカレくらい（約八キロ）離れていた別のキャンプまで行き、人々を襲った。おれたちは棍棒で、人々を殴って、殴って、殴って、殴りたおした。おれたちは鞭で、人々を打って、打って、打って、打ちまくった。こうして、一人の女の腕を掴んで引きずって行った。

おれたちがこうして取った女は、カウレだ。そして、アウクエだ（注…どちらも具体的な女性の名前）。彼女たちはみな、すぐに解放した。おれたちは、やめたんだ。彼女たちを捕まえても、拒んで、拒んで、すぐに逃げ帰ってしまう。おれたちは、疲れはてて彼女たちを解放した。彼女たちは、その後、別の男と結婚した（コウ、一九九四年一〇月二六日採録）。

この話を聞いたときは、温厚に見えるコウ老人にも、人間の凶暴性が潜んでいることを垣間見たようで驚いた。ただし、この語りで「被害者」として名前の挙がった女性一人は、ともに語り手の交叉イトコにあたり、正式に申し出れば結婚が推奨される間柄である。したがってコウ老人の語りでは、この「事件」も知り合い同士の度を越した悪ふざけといった印象を受ける。

しかし、女性の側からは、同じような出来事が悪ふざけでは済まされない暴力と屈辱として、怒りをもって語られる。次の証言は、若いころ男たちにキャンプを襲撃され、誘拐された女性の体験である。

男が女を略奪すること？ エヘイ、わたしは知っている。多数の男たちが一人の女をさらに来ると、女はとても怖がるんだ。わたしは知っているよ。わたしはそんな目に遭ったことがあるんだ。

男たちが来て、男たちは女を探して探して、キャンプにたどり着く。男たちはキャンプで食べ物を食べる。それから、突然、立ち上がってこう言う。「おれたちは、食べ物を食べに来たのではない。おれたちは、女のことに来たのだ。」

男たちは突然立ち上がって、女の腕を掴み、引きずっていく。男が女に襲いかかると、女は「ヤイ、ヤイ、ヤイ」と泣き叫ぶ。男たちは、女を引きずって、引きずって、女を連れて帰る。大勢の男たちが一人の男に女を取ってやるのだ。

男たちはたくさんいた。わたしは結婚していた。しかし、わたしを想う男が、わたしが夫と居るところにやって来て、わたしを引っ掴んで連れていった。夫からわたしを奪って引きずって行った。わたしの夫は、キャンプに残されて怒った。しかし、男たちはわたしを引きずって連れていった。わたしの夫を、男たちは殴って殴って殴りたおした。

夫たちは、わたしの手を掴んで引き戻そうとした。しかし、男たちは、さらに強い力でわたしの腕を引っ掴んで連れて行った。わたしのおばと、おばの夫と、わたしの夫が、わたしを掴んで離さなかったが、男たちもわたしを掴んで、ちぎれんばかりに引っ張った。それから、男たちは、わたしを引きずって連れていった。途中から歩かされた。わたしは男たちに囲まれて、彼らと歩いた。男たちはみな、グイだった。一〇人くらいの男たちだった。男たちは、みな

知らない男たちだった。見たこともない男たちだった。

わたしと男たちは、キャンプに居て、居て、居て、やがて太陽が沈んだ。そのとき、わたしは走って逃げた。あの男たちが怖くて逃げた。わたしは、男たちのキャンプに長居はしなかった。男たちを拒否し続けて、一人で走って走って逃げた。原野に一人でいるのは、とても心細かった。しかし、男たちが怖くて、ただひたすら走った。

バラシだった。走って、走って、走って、走って、パンの水溜まりに口をつけて水を飲んだ。水をたっぷり飲んで、それからまた走った。バラシだよ。若い男たちはバラシにこそ集まって、良からぬことを相談するのだ。

男たちの行いは良くない。とっても醜い。嫌がる女の腕を引っ掴かみ、ちぎれんばかりに引きずり回すのは醜い。女は男を拒んで、拒んで、頑なに男を拒むので、男は疲れはてて彼女を解放する。これで良いのだ。彼女は自分のキャンプに帰る。

わたしは夫のところに、すぐに引き返した。わたしが一緒に入れ墨をした（注…結婚の儀礼のこと）あの男のもとに。暗くなるのを待って、走って逃げた。そして、その日の晩に夫のキャンプにたどり着いた。

男たちは、翌朝になってもわたしに追いつかなかった。わたしが素早く逃げ帰ったからさ。わたしの夫は喜んで迎えてくれた。夫はわたしに食べ物をくれた。わたしはそれを食べた。それから、わたしたちは一緒に眠った（ギオキュエ、一九九四年八月二八日採録）。

彼女の体験から、若者たちが徒党を組んで見知らぬキャンプを襲撃し、暴虐の限りを尽くした末に女性を略奪したことがよくわかる。また、菅原（二〇〇三・七五）によると、男たちは女性を真ん中に挟んでわざと棘のある灌木を通過し、女性が男たちに従わなければ、棘で大怪我をするという残酷なことも行ったようである。しかしながら、若者たちを擁護する気はまったくないが、厳しい早魃の孤独を耐え抜いた後の秋の祝祭的な騒乱の中で、若者集団が自分たちのもった凶暴な欲望を放出させたであろうことは、想像できないことでもないのである。

六 アビの遊び

雨季のあとのバラシ（秋）に集まった人々は、レクリエーションも行った。「アビ」という、若者たちが先に重りをつけた棒を投げ合うゲームである。競技場として数メートルの高さの丘が必要で、若者たちは早朝から砂山を固めて丘を作った。なお、このゲームの名称も、投げる棒のことも、どちらも「アビ」という。

アビを投げる。男たちが遊んで、男たちが遊んで、アビを投げる。男たちは大勢だ。トゥトゥくらい（注…二〇歳くらい）の若者たちがアビを投げる。遊びながら。アビを投げて、走って、アビを拾ってまた投げる。アビは飛んで、飛んでいく。

一人の若者が走って、砂に刺さったアビを抜き取って再び投げ

る。アビは飛んで行って地面に落ちる。次の男がアビを投げ、アビは飛んで飛んで地面に落ちる。その次の男もアビを投げ、アビは飛んで飛んで地面に落ちる。若者たちは、自分のアビが落ちている所まで走って行って、アビを抜き取り、また投げた。このようにして若者たちは遊んだ。バラシに。

女たちは、少し離れたところで若者たちを見物した。女たちは歌った。「わたしたちは丘を、フフエ。わたしたちはキャンプを、ウフエ。」と、男たちに歌ってやった。

男たちはアビを投げる。女たちは楽しくて、女たちは嬉しくて、手を叩いてこのように声をかけた。若い女も、年寄りの女も、みな若者を観た。若者たちがアビを投げるのを観た。そして、男たちに歌ってやった。手を叩いて歌ってやった。男たちはアビを投げた。

彼はアビを投げる。アビは近くに落ちる。その男は言う。「アエッ、おまえたちのは、おれのを飛び越えた。」彼はアビを拾って投げ、アビは向こうに落ちる。彼は走って、アビを拾って投げる。投げて、向こうに落ちる。

夕方になると、人々はアビに興ずるのをやめて小屋に戻った。砂山だけが、ぼつんと、あとに残っていた。翌日、朝早く若者たちはやって来て、砂山を手でパンパン叩いて固め、尿をかけて砂を湿らせた。彼らは再び投げて、投げて、投げて、昼を過ぎるとやめた。そして、罌を仕掛けに行った(グァリ、一九九四年九月九日採録)。

私は、定住村で一〇歳前後の少年たちが四五人で棒を投げて遊んでいるのを見たことがある。縦一列に並んで、次々と前の少年の後を

追って走り、棒を投げては拾うという動作を繰り返し続けた。他の少年と、飛距離や走る速さを競っているという風ではまったくなかった。むしろ、投げては拾うというリズムや、前の少年の後について走るといふ動作自体を楽しんでいるように見えた。

遊動生活を送っていた時代のアビというゲームも、飛距離を競い合うことだけが目的ではなく、棒を投げて走って追いかけるという動作の流れの美しさも競っていたのではないだろうか。応援に集まった人々は、若者たちの力強さを賞賛し、とくに娘たちは、それぞれの鼻肩の若者に声援を送った。人々は、豊かな雨季が巡ってきて、再び皆と出会えたことを心から喜びあったのである。

七 終りに

長い乾季を突き破るのは、一筋の稲妻である。雷鳴をとどろかせながら雲がわき立ち、その雲から雨柱が立つ。雷鳴に揺り起こされ、カラハリの生き物が動き始める。金平糖形に棘をつけた種、地中深くに埋まっていた根茎、アカシアの枝の花芽。これらがいっせいに芽吹き始め、風景を緑に変える。休眠して乾燥に耐えていた人間たちも目を覚まし、水場であいさつを交わす。静から動へと、劇的に変わる自然に合わせ、グイたちも振り子のように両極を移動する。

セントラル・カラハリ・ブッシュマンは、ともに暮らすメンバーを頻繁に変えながら資源に合わせて遊動し、集団は分裂と融合を繰り返してきた。彼らがこのような流動的な居住集団を形成した原因として、食物の分配をめぐるトラブルやメンバー間の不和による分裂と

いった社会的要因も無視できないが、本稿では降雨が時間的・空間的に極端に偏在するというカラハリの自然環境を主軸に示えることで、グイがどのように季節に合わせて居住集団を離合集散させてきたかを彼らの語りから描いてきた。

カラハリに住むどの言語グループのブッシュマンにおいても、「雨季の始まりによって人々は活動を開始し、乾季中盤の気温の上昇とともに不活発になる」という活動パターンが当てはまるだろう。その中でも、セントラル・カラハリ・ブッシュマン（グイとガナ）の場合、このような活動パターンと集団サイズが同調し、「大集団で活動的」という位相と「小集団で不活発」という位相が、振幅を増大させながら交替するのである。

ここにおいて、遊動生活を送っていたころのグイとガナにおける、他人との関わり方や社会的ネットワークの意味あい、よりいっそう切実なものへと変化する。他人の存在を渴望する乾季が根底にあるからこそ、雨季に人間関係の網の目を過剰に紡ぎ出し、同時に社会的緊張も高まったことだろう。年長者たちが雨季に若者を集めて成人儀礼（今村 二〇〇一・一八九）を執り行ったのも、祝祭的な興奮の中から発生する「若者の欲望の暴走」を統制しようという意図があったからにちがいない。また、老若男女を問わず、恋愛による濃密な結びつきを強く求めたことだろう。彼らの社会がザーク（Tanaka, 1989）という婚外の性関係を、婚姻制度と対立するものではなく「大きな結婚」と呼んで婚姻制度の限界を越えるものとして捉えていたことも、乾季のキャンプの孤立と雨季の大集団という文脈の中で理解するべきである。

カラハリの大地があり、気象があり、風土という人間と自然との相互関係の中で人が暮らす。偏在する雨がつくる風土によって、グイとガナは乾季の絶対的な孤独と、雨季の集住にともなう昂揚感の両極端を往復して生きてきた。そのような自然環境をも含めた総体が人間の生活であり、このダイナミズムを理解するには、できうる限り彼らの体験に潜りこみ、そこから見えてくる世界を注意深く再現する作業を続けていくしかないとは私は考えている。

引用文献

- 池谷和信 一九九六「生業狩猟から商業狩猟へ—狩猟採集民ブッシュマンの文化変容」田中二郎・掛谷誠・市川光雄・太田至編『続・自然社会の人類学—変貌するアフリカ』アカデミア、二二—四九頁。
- 市川光雄 一九八六「アフリカ狩猟採集社会の可塑性」伊谷純一郎、田中二郎編『自然社会の人類学—アフリカに生きる』アカデミア出版会、二七九—三一頁。
- 今村薫 二〇〇一「砂漠の水—ブッシュマンの儀礼と生命観」田中二郎編『カラハリ狩猟採集民—過去と現在』京都大学学術出版会、一七五—一九九頁。
- 大崎雅一 二〇〇一「セントラル・カラハリ年代記」田中二郎編『カラハリ狩猟採集民—過去と現在』京都大学学術出版会、七—二四頁。
- 菅原和孝 二〇〇三「即物の性欲—グイ・ブッシュマンのことばと経験」松園万亀雄編『性の文脈』雄山閣、五一—八〇頁。
- 田中二郎 一九七二『ブッシュマン—生態人類学的研究』思索社。
- Barnard, A. 1979. Kalahari Bushman Settlement Patterns. In Burnham, P. and R. Ellen (eds.), *Social and Ecological Systems*. London: Academic Press.
- Barnard, A. 1986. Rethinking Bushman Settlement and Territoriality. *Sprache und Geschichte in Afrika* 7(1): 41–60.

Tanaka, J. 1989. Social Integration of the San Society from the Viewpoint of the Sexual Relationships, *African Study Monographs*, 9 : 153-165.

【付記】

本稿は二〇〇三年度名古屋学院大学研究奨励金による研究成果の一部である。